



献上奉告祭を終へ、出発する一行

第52回

「若布献上の儀」

皇室へ若布を献上

三月十九日、早春の玄界灘の天然若布を賢所、天皇皇
后両陛下、皇太子同妃両殿下、三笠宮殿下へ、高向宮司、
権田仁八郎氏(宗像大社海洋神事奉賛会会長・鐘崎漁業
協同組合代表理事組合長)、宮本昭則氏(宗像漁業協同
組合理事)、随行神職の四名が宮中へ参内し、恙なく献上
申し上げた。

この皇室への若布献上は、昭和三十八年に、「宗像七
浦」と称される、大島・鐘崎・神湊・勝浦・地ノ島・津屋
崎・福岡の組合員で結
成された「宗像大社海
洋神事奉賛会」設立の
際に、宗像大神の御神
徳が、国家・皇室の守護
であることから、皇室
の御安泰と聖寿の長久
万歳を祈念して始めら
れ、今年で五十二回目
を迎えた。この「若布
献上」は、秋の「みあれ
祭」と並び、同会の一



本年の献上者、権田氏(右)・宮本氏(左)



平成ノ大造営

時満ちて
道ひらく

余滴

「根引き松」というものを御存知であろうか。京都では今でも、根ごと引いた若松を水引で結い門に付け、それを「門松」とする。江戸時代の絵画でも描かれており「門松」の古形である▼元々「門松」とは、歳神様をお迎える依代であったものである。それが、正月の玄関・門の装飾へと変化した▼明治を迎え書籍・雑誌の挿絵などで東京発信の現在普通に見られる形状が全国的に普及したものと思われる。今一般的に見られる門松は、松竹梅がセットにされているが、一目見た感じでは「門松」と言いながらも「竹」がメインに据えられている▼正月も終わり春を迎えるのに時期遅れの話題であるが、門松も本来各地方の地域性があったはずである▼話は飛ぶが昨年の「八口ウイン」の光景、また節分の「恵方巻き(大阪起源)」など東京発信・文化の商業主義による普及と共に地方に残る文化の衰退が顕著である▼昔の地方は、情報が遅れて届く事により損をするなど「良い事無しだ」と負の側面があった。それがインターネットの時代を迎え便利な時代となったものである▼その中で地方が長年温めてきた良き風習・文化が廃れ画一化されてゆく事に強い危惧を感じる。皆様の周囲でも起きています事象である。文化について、もう一度見つめ直す時期に来ているのではないか。(佐)

神具・装束・授与品
井筒

装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401
フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 **株式会社 弘江組**
〒811-3406 福岡県宗像市稲元4丁目20 電話(0940)32-2567

行事である。

今年の若布は、二月に入ってから続いた寒気の影響が心配されたが、下旬には徐々に暖かくなり、順調に生育し、予定通り、三月一日に地島沖で採取開始。関係者の御尽力により、濃緑で磯の香りの強い良質な若布が採取された。伝統的な技法で加工された板状の乾燥若布が、三月十三日に当大社に奉納され、神職・巫女が厳選し形を整えながら規定の



福岡空港での手渡し式 客室乗務員に手渡される若布

量や袋に納め、献上の準備が進められた。献上前日の十八日、午前十時より本殿にて献上奉告祭が斎行され、杉箱に納められた若布を持って出社した。福岡空港では献上者をはじめ、例年若布を運んでいた多く全日本空輸株式会社の皆様も参列し、当社巫女より全日空客室乗務員への手渡し式が行われ、報道関係者の取材が続く中、若布は機内へ運ばれた。また、この便に搭乗する方々には、当社より記念品として張子の縁起物が手渡された。

献上当日の十九日、午前十時より高向宮司以下四名は坂下門より宮中へ参内。掌典長楠本祐一氏に高向宮司が若布献上で参内の旨を言上、同掌典長を通じて賢所に献上申し上げた。続いて、侍従職



若布と同便に搭乗する方々へ、記念品を贈呈

事終えることができた。尚、本年も若布献上に際し、格別の御支援を賜りました出光興産株式会社、全日本空輸株式会社をはじめ、関係各位には紙面もちまして厚く御礼申し上げます。



三月中旬の奉製作業

石田浩昭氏を通じて天皇・皇后両陛下へ献上申し上げた。宮殿にて高向宮司が記帳後、宮中三殿参拝の栄に俗し宮中での献上の儀を滞りなく終えた。宮中を辞した一行は赤坂御用地へ向かい、東宮侍従池田元一氏を通じて皇太子・同妃両殿下へ献上申し上げ、更に三笠宮付宮務官板倉幸治氏を通じて三笠宮殿下へ献上し上げた。ここに宗像大社並びに宗像大社海洋神事奉賛会の春の重儀「若布献上の儀」を無

人事異動 (神職)	
四月一日付で人事異動を左記の通り行いました。	
宮司	高向 正秀 神宝館 館長
権宮司	葦津 敬之 社務本局長 造宮室統括(兼)
禰宜	葦津 幹之 庶務部 部長 文化財管理事務局長(兼)
〃	渡邊 秀丸 経理部 部長 海洋分局長(兼)
〃	杉山 安彦 祭儀部 部長 宮司兼務社管理主任(兼)
権禰宜	長友 貞治 祭儀部 儀式課課長
〃	佐々木大治 庶務部 庶務課課長
〃	中原 裕生 祭儀部 賽務課課長
〃	神島 亘 海洋分局事務局長
〃	坂本 敬 庶務部 庶務課主任
〃	御床 直之 経理部 会計課課長
〃	大塚 宗延 庶務部 広報課課長
〃	壹岐 貴寿 造宮室 室長
〃	松林 拓 造宮室 室長代理
〃	吉野 理 経理部 用度課主任
〃	宗像 崇史 祭儀部 賽務課員
〃	鈴木 祥裕 庶務部 広報課員
〃	日高 庸介 経理部 用度課員
〃	船越 裕介 祭儀部 賽務課員
〃	吉武 誠礼 祭儀部 儀式課員
出仕	黒神 直豊 祭儀部 儀式課員

時満ちて道ひらく

造営日記 ⑤

新たに葺き替えられた拝殿



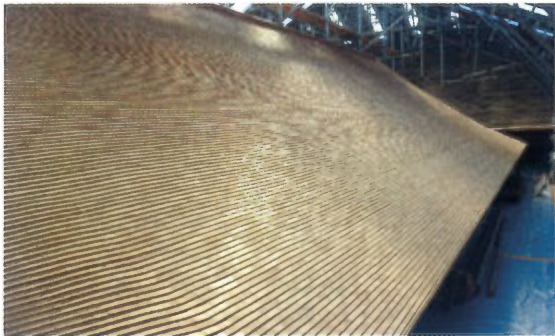
■葺替え作業を終えた拝殿

葺替え作業を終え、中央上部に棟瓦を取り付けるのみとなりました。



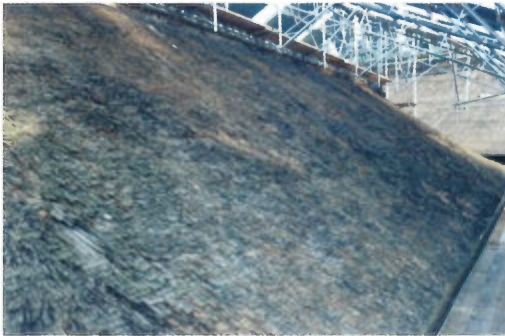
■葺替え作業中の拝殿

連日7～8名の職人さん達が作業しています。職人さんは、口に何本もの竹釘を銜え、口から取出し素早く板に打ち込みます。



■工事後の辺津宮拝殿屋根(こけら葺)

今回は葺込銅板も入れて、さわら板の厚さも前回の1分板(約3mm)から2分板と倍の厚さになりました。



■工事前の辺津宮拝殿屋根(こけら葺)

平成7年に屋根を葺き替えているが、前は葺込銅板が入られていない為早い時期から屋根材(さわら板)の摩滅・腐食が著しい状況でした。

松尾神社祭齋行

三月十九日、新酒醸造を無事に終えたことを奉告し、感謝の誠を捧げる恒例の酒造報賽祭が、境内・末社松尾神社で酒造関係者参列のもと斎行された。

大前には酒造されたばかりの新酒が供えられ、当大社の御神酒を醸造している勝屋酒造(「櫓の露」・伊豆本店(「神酒宗像」)の代表者が参列し、午前十一時に祭典が執り行われた。

修祓の後、昨年暮に仕込んだ新酒が芳醇に出来たことを感謝すると共に

に今後益々の酒造元の栄えを祈念する祝詞が奏上され、各々玉串を奉奠した。

引き続き本殿においても報賽祭を斎行、宗像大社への神恩を感謝し、玉串を捧げて祭典は終了した。



氏子会評議員会開催

三月十九日、今年度最後となる氏子会評議員会が置鮎会長以下六十名出席の下、当大社清明殿にて開催された。

午前十一時、仮本殿にて正式参拝、清明殿へ移動し開会、議事は置鮎会長が議長に選出されて審議は始まり、事務局より春季大祭斎行・氏子奉幣氏選定の件が説明され、旧宗像市・南郷地区より選定頂くことが承



認された。

次に、平成ノ大造の御礼、修復進捗状況の説明を行い、審議は終了した。

本年度、当大社の諸行事・祭典等にご奉仕頂きました役員・評議員・総代の皆様方には衷心より御礼を申し上げますと共に、引き続きお力添えを頂きますようお願い申し上げます。

氏貞公墓前祭

本年は神式により斎行、公の遺徳を偲ぶ



第八十代最後の太皇太后、宗像氏貞公の墓前祭が、命日である三月四日、当大社より神職三名が出向し神式にて執り行われ、菩提寺である承福寺の埜村住職、隣船寺住職、興聖寺住職、この地に住み代々墓守を続けてこられた占部家の方々、地元今門地区の皆様、当大社高向宮司が参列し、公の遺徳を偲んだ。

氏貞公は十六世紀後半の戦国時代末期を、大友氏、龍造寺氏、島津氏、毛利氏等の大勢力が北部九州を支配下に置こうと鏖る中、懸命に神郡宗像を守り抜いた英傑である。又、乱世にあって辺津宮や中津宮の本殿再建をはじめ、神郡宗像内の荒廃した社寺の復興にも努められた。しかし病をこじらせ、天正十四年春(二五八六)葛ヶ城で四十二歳の若さでこの世を去られた。氏貞公は自らの死を三年間秘すよう遺命された為、亡骸は占部右工門が竹皮籠に納め深夜密かに上八村「乙尾の丘上・老松の下」に埋葬された。

この墓前祭は昭和六十年より当大社と承福寺が隔年で奉仕している。郷土を守り抜いた中興の祖・氏貞公御一代の生涯に思いを馳せ、我々も更なる神徳宣揚に心を尽くす誓いを新たにしたい。

宗像大社菊花会

新年総会並び菊作り講習会開催



去る二月二十二日、恒例の宗像大社菊花会新年総会並び菊作り講習会が国民宿舎ひびきにて、会員等約七十名が出席し盛大に開催された。新年総会では、まず、昨年逝去された千々和会長の後任、新会長選任の件が審議され、当会創設当時より御尽力頂いている吉田徹生氏(旧顧問)が新会長に承認された。次に、

第四十四回西日本菊花大会日程について議論がなされ、二十六年度の日程が決定された。総会終了後、(一社)全菊連九州地区菊作り講習会が行われ、国華園主催の全国大会において高松宮妃記念杯など多くの最高賞を受賞されている、(二社)全菊連山中誠祐常務理事(福井県在住)を講師にお招きし、「公認審査員の心得及び審査基準について」「18cmの輪台が似合う大菊厚物作り」と題して、二部に亘りご講演頂いた。

講演では、ご自身の多くの失敗に基いた菊の栽培方法を分かりやすく説明頂き、受講者は熱心に聞き入り、定刻を過ぎても質問は止まず、惜しむように終えられた。講習会終了後は、恒例の新春懇親会が開かれ、会員等は互いの菊作りや、菊花会発展のため尽きることはない話題に花が咲き盛大裡に幕を閉じた。



新会長 吉田 徹生氏
昨年逝去された前会長、千々和 和正信氏には、昭和四十六年の

宗像大社菊花会創設当時より小菊盆栽芳栄会員として当会に在籍し、平成元年からは理事長、平成十八年には会長に就任賜り、盆栽作りの出品や審査、栽培の指導、会員拡充など四十年に亘り、菊花の普及発展に寄与頂きました。ご生前のご功績に感謝の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。



山中誠祐先生による講演

東日本大震災復興祈願祭 風評被害にあう福島のみを頒布

東日本大震災から三年が経った。しかし現在でも避難生活を余儀なくされる方、復旧が進まない地域、風評被害等、問題が山積している。

震災後、県内神社の若手で構成する福岡県神道青年会は、福島県内で瓦礫撤去等の支援活動を行い、また現在も一般の方々を対象とした研修会を開催し、被災地の現状を学ぶ活動を行っている。



去る三月十一日、福岡県神道青年会が企画し、県下の神社

で東日本大震災復興祈願祭が斎行された。JA福島中央会・JA福岡中央会の御協力を得て、それぞれの神社の御神前に

は、風評被害にあう福島県産米がお供えされ、祭典後、参拝者等に配られた。準備した米百グラム入りの小袋八万袋は、多くの方々に現状を理解して頂くため、氏子の方々の奉仕により調製され、JR博多駅、天神等県内各地で頒布された。

当大社でも十一日午前十一時より宗像農協関係者参列の下、仮本殿にて斎行され、三百袋の御米が参拝者等に配られた。

用意された小袋は、瞬く間に無くなり、震災地より遠く離れた福岡ではあるが、震災に想う気持ちに変わりがないと実感した。



地元総代研修旅行

地元総代の研修旅行が三月五〜八日の日程で実施され、総代七名、引率神職一名の計八名が参加し、伊勢・京都方面へと向かった。

五日夜刻、フェリーにて出発した一行は、六日早朝には大阪に到着し、伊勢神宮へと向かい、昨年遷宮された新しい内宮・外宮の両宮を御垣内参拝した。外宮では古殿地を拝観し、内宮では神職によりご由緒や境内をご案内いただいた。

翌七日は京都へ向かい、当大社の神宮寺でもあり、隣接



する鎮国寺の名誉住職・立部祐道氏が門跡を勤められている仁和寺を参拝し、門跡自ら庭園をご案内いただいた。その後は、松尾大社を正式参拝。権宮司様より当大社の御祭神・市杵島姫神を相殿の神として祭られている事や、ご社殿等のご説明をいただいた。一行は松尾大社を後にし、帰路についた。

船中二泊という強行の研修旅行ではあったが、神宮をはじめ社寺に参拝し、畏敬の念を再確認できた有意義なものとなった。

作家 北康利氏参拝

去る、二月十六日、作家の北康利氏が参拝された。

北氏は、東京大学法学部卒業後、富士銀行へ入行。平成二十年にみずほ証券を退職、現在は作家として活躍されている。福沢諭吉・松下幸之助・吉田茂など歴史上の人物を取り上げた著書を多数執筆。特に『白洲次郎 占領を背負った男』（講談社）では、第十四回山本

七平賞を受賞されている。

当日は、葦津権宮司の案内により仮本殿、第二宮・第三宮、高宮祭場を参拝、さらに神宝館を拝観いただいた。北氏は出光興産創業者の出光佐三氏を題材にした対談などもされており、出光興産を象徴する日章丸の船鐘(祈願殿に展示)なども熱心にご覧になられていた。

北氏の今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。



(続)

浜の寄物

287

いしいただし

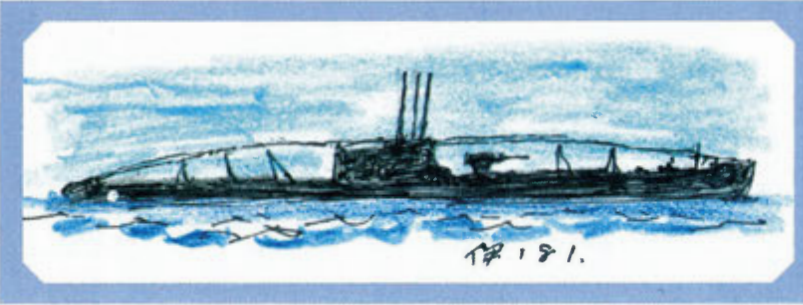


宗像神社史(附巻)で戦争中の神社の状況を見ていたら、沖ノ島の要塞の建設準備や建設と共に多くの軍関係が参拝している。多くは邊津宮で、中津宮、更に沖の沖津宮参拝は少ない。佐世保鎮守府や下関要塞司令部の海軍関係のトップ級が多い。その中で南雲忠一中将が昭和十八年(一九四三)十月十九日に邊津宮を参拝している。

第一航空艦隊の司令長官として、空母六隻をひきい、大戦果をあげた。花々しい緒戦の勝利、それが一転して昭和十七年六月のミッドウエー海戦では「運命の五分間」といわれ攻撃機の武装転換に時間をとり、空母四隻飛行機三二二機、歴戦のパイロットを多数失った。日本海軍の敗北のはじまりとなった。

その後南雲中将は佐世保鎮守府司令長官となりその時昭和十八年一月十九日に邊津宮参拝にきている。昭和十九年四月に中部太平洋方面艦隊兼第十四航空艦隊司令長官に任じられたが、既に艦艇も、航空機も多く

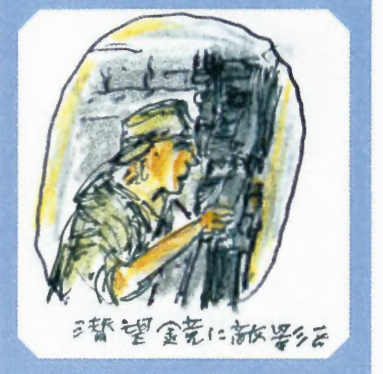
「栄光と悲劇を背負った司令長官」であった。昭和十六年十二月の真珠湾攻撃では



が失われ、各戦線で敗退が続き、昭和十九年六月のマリアナ諸島・サイパン玉砕戦で自決した。昭和十八年の八月三日に津屋崎沖に碇泊していた潜水艦伊号一八一(艦長海軍中佐大橋勝夫)が「宗像大神を奉祀する」として参拝している。

伊号一八一は「海大七型」で伊一七六、一八五まで十隻が建造された。「日本軍艦ハンドブック」(光人社)によれば、この艦型は伊号一七四の改良型であり、基準排水量一、六三〇t、水上速力二十三kt、全長一〇五・五m、魚雷発射管は艦尾をやめて艦首に六門あつめている。伊号一七六、一八五号は作戦中に沈没ないし消息不明となっている。伊号一八一は十九年一月十三日、ラバウル発、十六日バリ島着の予定で作戦輸送に従事、十六日以降、消息不明。バリ島所在「陸海軍部隊情報」によれば「グイ

ディアグ海峡」において英駆逐艦、魚雷艇と交戦、沈没と推定される(日本軍艦ハンドブック)。
日本の潜水艦の歴史を概略すると、明治三十七年の日露戦争にアメリカから五隻を購入し、横須賀で組立中に戦争が終結、実践に間に合わなかったという。その後、英、仏、伊から購入して技術や操艦、用兵術を研究独自の潜水艦戦術を生み出している。第一次大戦でドイツのUボートを戦利品として日本に運ばれている。今時大戦では潜水艦に零式水上偵察機を搭載する大型潜水艦も建造している。(伊号四〇〇は三、二〇〇t三機の水上飛行機を登載)。また、大戦中にはドイツ潜水艦(Uボート)と五回にわたり交流、軍需品や機



密品の交換等を行っている) 日本の潜水艦は六十四隻が開戦時にあり、戦争中に一二六隻建造し、一三二隻が沈められ、残った艦も修理を要するものばかりであった。潜水艦は「鉄の棺桶」といわれ、撃沈されると構造上脱出がむづかかった。
伊号五十八は昭和二十年七月原子爆弾を運んだ米重巡インディアポリスを撃沈するという戦果をあげている。

宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日メロ



北九州市 八幡西区 豊田 光子
 いつの日もわれの傍へに据え替へし仏壇の木わづかに匂ふ
 愛する亡き人々を身近に感じ、匂いも懐かしい仏壇。
 三句は「据え置ける」に。

宗像市 日の里 大和美由紀
 豆撒きを待ちしひとときもてなしの甘味の効きし汁粉いただく
 もてなしを楽しんだ作者。「汁粉」ただ甘みの効くを
 と汁粉を強調しては。

うきは市 浮羽町 向 則正
 わが仕草戦死の父に似てきしと亡き母言ひき五十年前
 五十年前の母の言葉に作者が両親を恋う心情がこもる。
 二句「戦死せし」に。

福津市 中央 池浦千鶴子
 ケイタイに車庫の電気を点けよとて出でたる外は満月の照る
 思いがけなく見た満月。初句は言った人がわかるよう
 に例えば「子に言われ」。

宗像市 多禮 早川 祥三
 幸福は救急車ごとかけ抜ける遠さかる燈も芒野の風
 救急車に乗る事態になった人を考える作者。初句は「不幸せは」では。

福津市 若木台 山崎 公俊
 こな雪はやがて霰をまじへたり神苑の池ことに冷えゆく
 雪が霰に変わる時間の経過で、神苑の池のあたりの冷
 えがリアルに感じられる。

宗像市 田久 巻 桔梗
 降りたてば切符を受けてお帰りと拳せし友よふるさとは吹雪
 大雪のニュースに旧友を思う作者か。友の動作の描写
 で光景が目に見えるよう。

北九州市 戸畑区 田中ハツセ
 和の心もちて過せば世の中は幸せならむ百まで生きる
 皆が和の心で過ごせたらという願いが素直に詠まれた
 歌。作者が幸せに百歳を迎えられるようお祈りする。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦
 ホールインワン知らせる妻は両手にて丸を描けり青空のもと
 ゴルフでホールインワンが出た瞬間。快事なので、四
 句は「大き丸描く」に。

宗像市 土穴 山本 静子
 思いなき救急車にて入院すなへのはとんと覚えず
 緊急入院した作者の動揺が生々しい。初句「思いがけ
 ず」、三句「前後の」に。

宗像市 池田 森 龍子
 この齢になりても梅が咲くゆえに如月を待つわが誕生日
 好きな梅が咲くので誕生日を待つという作者。四・五句
 入れ替えると言葉の流れが、より良くなる。

福津市 若木台 野間 精一
 朱の筆の並み立つごとく芍薬の新芽伸び出づ立春過ぎて
 静かだが希望が感じられる歌。初・二句の比喩が美し
 く、よく効いている。

◆ 選者詠

ながき歳そひたる女男のやすけさに並び錆びゆく配線のレール
 銃声を聞かず眠れるしあはせに思ひはいたる眠れざる夜半

俳句作品集

第六〇五回

宗像市 武丸 白土 凌一
 「ソチ」を見て春の陽光の吾心かな
 宗像市 多禮 早川 祥三
 日めくりを日々捨つること寒ゆるむ

編集後記

編集作業に追われるなか「卒業」の言葉が耳に入り、「立つ鳥あとを濁さず」「きちんと先生に挨拶してきなさい」と祖母から卒業を迎えるたびに諭された言葉がふと頭に浮かびました▼四月、新入生、新社会人、人事異動など新たな場、環境でスタートを切る方も多いことでしょう。例年、この時期、当大社でも、新入社員の方らしき参拝者の初々しい姿が見受けられます。期待と不安で…と良く言いますが、お参りを終えると少し不安が解消されたような顔つきになっているようで、心より所としての神社の重要性を毎年、再認識する時期でもあります▼本年度も引き続き当該の編集を担当してまいります。「立つ鳥あとを濁さず」ではなく、一歩、一歩、足あとを残してまいたいと思います。今後ともご愛読宜しくお願い申し上げます。(鈴)

4月祭事暦

- 1・2日 春季大祭
 (1日目) 午前11時～一日祭
 (2日目) 午前11時～二日祭
 午前11時40分～
 高宮祭、第二宮・第三宮祭
 宗像護国神社 春季大祭
 交通安全講社祭
- 15日 月次祭
 午前10時～
 高宮祭、第二宮・第三宮祭
 午前11時～総社祭
- 29日 昭和祭
 午前11時～

発行所 宗像大社社務所・宗像会

住所 〒八一一一三五〇五
 福岡県宗像市田島三三三
 電話 (〇九四〇六二一一三二一)(代)
 発行人 葦津幹之
 編集人 大塚宗延・鈴木裕裕
 制作・印刷 セネラルアサヒ

毎月1日発行
 定価1年送料共 1,000円